

(一) 號二十百五千一第) 聞新日每繁常 {日八月一十年二十大正} {可認物便郵種三第}

(日曜土常磐新開毎日)

四月二年和昭四月二日 (四)

刊 夕 日 一 月 二

昨日迄農村に居た文學青年が今日大都會に出づるや忽ちに都會人と區別のつかぬやうな生活儀式をとる。それ許りか農村にゐてもおのが郷土を省るではなくはるかな都會を憧るゝ夢のやうな氣持で文學を読み自分も詩作位する身は東北の山村に居りながら南國人のやうな生活を歌ひ都會化した物の云ひぶりをしてゐる。

寄
書
鄉土と田園文學

何たるむじゆんぞ、郷土を
へいりの如く捨てゝ顧るさ
へしない田園詩人、それが
どうして自分の本物を打ち込
む作が出来やうぞ、煤烟の
下に黒まみれになる職工に
して始めて職工の苦惱も感

